

ことばのうみ

宮城県図書館だより

MIYAGI PREFECTURAL LIBRARY No. 34 2010. 7

特集  知ってトクする! NDC

版を重ね読み継がれている『黙移』。
『東北小国民』に「わが生ひ立ちの記」(1946年3月)などを寄せ、「アンビジャス・ガール」と呼ばれた幼年期を振り返っている。



宮城ゆかりの作家を、作品の一節ごとにも紹介します。

「出郷」

私の生れましたのは東北の青葉の城下、あの仙台でございます。生家は星と申し、伊達藩の漢学者の家でございます。祖父は晩年、評定奉行をつとめましたと聞いております。

儒教を奉ずる家の事とて、祖先の霊を祀るところを祠堂と申し、すべて白木づくり、まことに清浄にとりなされてはありますけれど、何となく淡々としてさびしく、子供心の満たされぬものがございました。

そして友達の家にまいりますと、そこには床しくも香煙のかすかにただよう仏間があり、金色の光りの籠る仏壇に、その燈明の火を見るのでございました。すると私はその前に行つてじつと掌を合わせたくなりました。あ、自分の家にもこういう火が点つていて、家中のものが、朝夕に集つて、心を一つにして合掌礼拝するとういうようであつたらと、仏教徒である友達の家を真実うらやましく思ったものでございますが、いま思えば、それが私というもの心の芽の、はじめてこの世に双葉をひらいた時でもございましたでしょうか。

(『黙移 相馬黒光自伝』平凡社 一九九九年 15ページより)

そう ま こっこう
相馬 黒光

明治8年～昭和30年(1875～1955)

本名は良。旧仙台藩士・星家の三女として生まれる。

宮城女学校をストライキ事件により中退。フェリス女学校を経て、明治30年(1897)年に明治女学校を卒業。

相馬愛蔵と結婚し、東京で「中村屋」を創業する。多くの芸術家・文化人と交流した。昭和11年(1936)の『黙移』に続き、『広瀬川の畔』などを出版した。